

こどものひろば

今年は『子ども読書年』です。

「子ども読書年」は、国を挙げて、子どもの読書活動を応援することを昨年の国会で決めたものです。そこで、文京区の図書館でも「よんで きいて だのしもう」をテーマに、10月27日(金)～10月29日(日)の間、文京区女性センターをメイン会場として絵本の原画展、講演会、人形劇、パネルシアターなど、いろいろな催しを行います。是非、遊びに来てください。

クマのプーさん



うまれかわった岩波少年文庫

「岩波少年文庫」が、創刊50周年を機に、装丁と判型を改め、ゆつたりとした新版として刊行されています。「ナルニア国ものがたり」や「ドリトル先生物語」のシリーズ、「星の王子さま」「長くつ下のピッピ」「クマのプーさん」など、海外の名作をはじめ、新たに刊行された作品もあります。図書館でも、新しくなった「岩波少年文庫」を受け入れていますので、どうぞ、ご利用ください。

名作映画を観る会

おしらせ

第219回 10月14日(土) 81年 米

(110分) 『黄昏』 監督/マーク・ライデル
出演/キャサリン・ヘバーソン/ヘンリー・フォンダ/ジェーン・フォンダ
ニューイングランドの美しい湖を望む避暑地。老境に達した夫婦の愛情と悲哀を中心に、家族の世代間の愛と断絶。

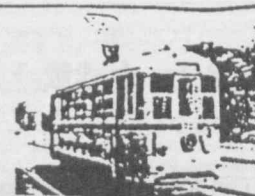
第220回 11月11日(土) 85年 東映

(130分) 『それから』 監督/森田芳光
出演/松田優作/藤谷美和子/伊ッセー尾形
漱石の名作の映画化。明治末期の雰囲気を実に再現し、森田独特のリズムと映像美に貫かれた恋愛映画の傑作。

第221回 01年2月10日(土) 57年 日活

(110分) 『幕末太陽伝』 監督/川島雄三
出演/フランキー堺/石原裕次郎/小林旭
幕末の品川遊郭を舞台に、居残り佐平次のニヒルなバイタリティを軽妙な風刺にのせて描く川島雄三の傑作。

開演 2時00分
場所 本駒込図書館集会室



都電の見える 図書館新聞

町が好き 人が好き 本が好き

2000.11.10 発行
第118
区立本駒込図書館
〒113-0021
文京区本駒込 4-35-15
電話 3828-4117

文京区立図書館のベストテン

を紹介します。10月27日から11月9日は読書週間でしたが、素敵な本に出会えたでしょうか。ベストセラーは、それだけ多くのひとに読まれてきたわけですから、ひよっとすると、そのなかから、感動する本に出会えるかもしれません。

2000年11月1日現在

タイトル	著者名	出版社名	マーク番号	貸出数	準備中	所蔵数	予約数
「ハリー・ポッターと秘密の部屋」	J. K. ローリング	静山社	1-00039660	15	3	18	156
「ハリー・ポッターと賢者の石」	J. K. ローリング	静山社	1-99050883	16	11	27	137
「命」	柳 美里	小学館	1-00028607	28	11	39	111
「話を聞かない男、地図が読めない女」	アラン・ピーズ	主婦の友社	1-00014115	20	4	24	109
「ああ言えばこう嫁行く」	阿川佐和子	集英社	1-00038494	17	6	23	93
「あやし 怪」	宮部みゆき	角川書店	1-00033209	13	8	21	87
「光源」	桐野夏生	文芸春秋	1-00039811	7	5	12	65
「新宿鮫風化水脈」	大沢在昌	毎日新聞社	1-00037723	11	2	13	63
「朗読者」	ヘルンハルト・シュリンク	新潮社	1-00018607	18	6	24	59
「貴賓室の怪人」	飛鳥編	内田康男	1-00042174	8	3	11	57

以前、ベストセラーになった本のうち、次の本などは予約をすると比較的すぐに読めるようです。

永遠の仔(上) 天童荒太著	1-99008656	27	7	34	2
沈まぬ太陽(1) 山崎豊子	1-99027141	18	7	25	0

『神明町昔話』

～ すまいと暮らし ～

(62) 《 連載 》

宮崎 洋子
(本駒込四丁目在住 富士前小卒)

戦前の住宅地には黒い瓦屋根の木造一戸建ての家が並んでいたが、その殆どは借家であった。四室か五室程の小住宅は縁側が通っていて小さい庭が付いていた。家賃は凡そ収入の四分の一で、都合によってどこへでも引っ越しが出来るので人々は自分の家を持つ必要がなかった。出入りの商人や郵便配達の人に頼んでおくと手頃な家を見つけられる。街を歩いていると「貸家」と筆で書かれた半紙が門の戸や塀などに斜めに貼ってあるのを見かけた。どうして斜めなのかというと、家を探している人は貸家の前で「どうしようかな。ここに決めようかしら」と首を傾けて考えるので貸家札がはすになっている方が見やすい。これは落語の話だからあまりあてにはならない。「売家」という札もたまに見かけたが、これはだいたい大きい家であった。川柳に「売家と唐様(からよう)で書く三代目」というのがある。初代は裸一貫で財を築き、二代目は何とか跡継ぎとなるが、三代目は学があっても甘く育てられたので家を手放すような破目になる。達筆で「売家」という貼紙を書くという比喩である。



主婦は玄関の格子戸や廊下を磨きたてて、借家を大切にしていた。どの家にも二畳の玄関部屋があるが家具は置かず、お客様が来るとそこへ出て対応する。上がらずに用件を済ませて帰る人もいるが、座敷に通る客は帽子やコートを脱いで玄関部屋に置く。茶の間で食事をしていても、奥で子どもが玩具箱をひっくり返していても、玄関の二畳があるおかげで来客には見えないようになっていた。

電話が普及していなかったので来客が多く、毎日のように知人や親戚の人などが手みやげを持って訪ねてくる。学校から帰ってきて、玄関に藤色の草履やレースの parasol が置いてあると女客だと判る。女性性は他家を訪問する時には他所ゆきの衣服でおめ

かしをするのが常識だったので、女客の美しいよそおいを見られるのが嬉しかった。紳士物の革靴がぬいであるのがつかりで、背広を着たおじさんを見てもちっとも面白くない。食事時にはお鮎など取ってもてなした。客が持参したお菓子を供する時は必ず「お持たせですが」とことわるのが礼儀だった。



屋に客間として使った座敷は、夕方にまた掃除をして、夜は寝室になった。その中には自分の部屋を持っているこどもは殆どいなかったの家族はいっしょの生活だった。

勉強机は引出しに文房具を入れておくだけで、夕食後は茶の間の食卓が机になった。こどもたちは周りに座って宿題をしたり、画を描いたりした。母親は鉛筆けずりを引き受けて切出しナイフできれいにけずってくれた。

縁側は長さ三間程で便利な場所だった。近所の人はいそいでここで用事を済ませて帰り、行商人は荷をおろして商売をしていく。雨の日は外で遊べないので友達をよんで縁側でビー玉転がしやまりつきをした。ジャンケンをして勝ったものが座ぶとんに座り、角(かど)にひもを結びつけてそれを敗者が肩にかけて引っぱるとそりのように滑るので面白かった。床にローソクを塗りつけるとよく滑ったが、あとで歩くと危険だといって母におこられた。

庭は植木棚に植木鉢が並び、万年青(おもと)の根元には卵の殻がいくつも伏せてあった。当時、鶏卵は高価で現在のお金で一コ二百円位したので病氣見舞の贈物などに使われた。極彩色の鶏の画が印刷されたボール箱にもみがらを入れ、十箇か十五箇条の卵が大事そうに収められていた。万年青の根に卵のからを伏せておくとも肥料になるということであった。春には朝顔やおしろいの種を播いて、夏に花を咲かせるのが楽しみだった。縁日で買ってきたひよ

この鳥小屋を庭の隅につくったことがあるが、数日後には穴を掘って「ひよこの墓」と書いた札をたてることになった。



たいていの家には神棚と荒神(こうじん)様が祀(まつ)ってあって、一日と十五日にはお榊(さかき)を取り替えた。枯れたお榊はその家の衰運を示すというのでいつも青々とさせてあった。台所に祀る荒神様は火の神で勝手元から火事が出ないようにというジンクスであった。台所の床はあげ板といって何枚か取りはずしが出来るようになっていて、床下に野菜や漬物などを保存した。夏でもそこは温度が低いので昔の人の生活の知恵だった。

近隣の人々はお互いに助け合って暮らしていた。こどもが怪我をして母親がおろおろしているような場合には、近所の主婦が消毒液とガーゼを持ってきて手当てをしながら「これはすぐに医者へ連れて行っただけで、夕食後は茶の間の食卓が机になった。こどもたちは周りに座って宿題をしたり、画を描いたりした。母親は鉛筆けずりを引き受けて切出しナイフできれいにけずってくれた。」などとアドバイスする。育児の経験がある人は若い母親の相談にのって面倒をみていた。私の隣家には四人の男児がいたので、腕白盛りのこどもがいつも母親に叱られていたが、泣声がきこえると私の母が行ってこどもをなだめた。怒っていた母親の興奮も治まって児童虐待などに至ることがなかった。

超「20世紀」(上・下)

吉本隆明著 聞き手 田辺伸和
(アスキー出版)

読書雑誌

目 日かなりの数の書籍が出版、発行されている。どのような書籍を読むかは各人の好みによるが、私の場合、日刊紙の広告欄や読書欄の新刊紹介、評論紙面に目をとおして選択し、購入、または、図書館を頻繁に利用することになっている。

本書は、フリージャーナリストとインタビュー形式による対談の内容をとりまとめたもので、上巻では、最近生じた社会問題のなかから、酒鬼薔薇事件、学校崩壊などの少年犯罪、教育論などについて取り上げ、著者ならではの鋭い洞察力で語られている。

そのなかで、人間形成は一歳未満のうちの母親の育て方如何による、ということに共感し、経済の豊かな今日、子供の目標が失われつつあることを感じた。

また、下巻は、公判中のオウム、インターネット、平

高齢の夫婦で暮らしていて、ご主人が長いこと寝ついている家もあった。ご主人は庭が見える座敷に床をとって縁側に鳥籠や金魚鉢を置いて眺めていた。近所のこどもが通ると垣根ごしに話しかける。私の弟はラジオのアナウンサーの真似が得意だったので、時々縁側に行きつて実演してみせた。「オホーツクの低気圧が張り出して…」と天気予報や、野球の実況放送などやると大喜びで「上手だねえ」とほめてくれた。私も時々、買物をたのまれたり、医院に薬を取りに行ったりしたことがある。在宅介護などという言葉はなかったが、年をとれば誰でもこうなるのは当たり前といった感じであった。

借家でも住み込みの女中さんがいる家は珍しくなかった。当時お手伝いさんの給料は一月五円から七円で現在の三万円位だったので庶民でも必要ならば女中さんを使っていた。労働賃金は驚く程安かった。けれども人々は分相応の生活を大切にしている。背のびをせずに毎日を楽しんでいた。

関東大震災や、太平洋戦争で罹災した市民の多くは借家に住んでいたもので、家を失っても全てをなくしたという絶望感が少なかったのではないかなと思う。

成不況、クビの宣告などの時事問題について語られている。現在は生産の時代を過ぎ、消費本位の資本主義の段階にあるという主張から、フリーターの増加や、発想の転換が必要であることや、ITによる企業の革命が生じるのかどうかに興味を覚えた。

上下巻を通じ魅力を感じたのは、著者が、自分を弁護するような言動が全く見られず、実感に即してものを考えていること、それも内外の目を通し両方の視点から人間性を全体的にとらえて、思想を築いていることにあるからだと思う。

ちなみに、著者は、本駒込に在住しており、吉本は父の父親である。よく田端、谷中銀座をぶらぶらしているとのこと、お目にかかる機会もあることであろう。地元の著名な評論家として誇らしく思い取り上げてみた。

小岩井 寿夫 (本駒込四丁目在住)

こどものひろば

☆もうすぐ、クリスマス☆

11月29日(水)午後3時15分から、本駒込図書館で「クリスマスの本」を紹介するので、みなさまの参加をお待ちしております。ここでは、2冊しょうがします。

「サンタクロースっているんでしょうか?」 「おおきいツリーちいさいツリー」
中村 妙子 訳 偕 成 社 ロバート・ハリー 文と絵 光吉 夏弥 訳
8歳の少女の質問に サンタクロースって 大日本図書
こたえ、ある新聞社が、 ウィロビーさんのお
愛情をこめて、味い 屋敷に届けたのは、
深い返事をだしました。 見たこともないような
アメリカの実話です。 大きなクリスマス・ツ
分類 7才 リーでした… 分類 8



クリスマスこども会

12月6日(水) 午後3時~(2時45分集合)
人形劇「こぎつねクックのものがたり」ほか
出演は、クレヨンカンパニー

C D 紹介



ロシアン・ジャズの鼓動!

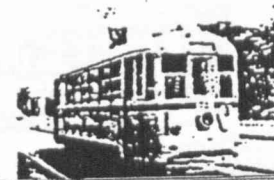
金管奏者の宝庫ロシアから、
最強のホルン奏者が登場。

Arkady
Shilkloper
HORNOLGY

ボリショイ劇場オーケストラとモスクワ・フィルのホルン奏者を経て、
現在クラシック、ジャズ、ワールド、ニューエイジなどの分野を縦横無尽に駆け抜ける、
超絶・無敵のホルン奏者「アルカージ・シルクローベル」。
一本のホルンだけで演奏される独創的なアレンジ、並みはずれたテクニックは、
既存のカテゴリーを超えて独自の音楽世界を生み出す。
日本のジャズ・リスナーに衝撃を与える、国内初リリース!

307012185 1E1合集

(スウィングジャーナル 11月号)



都電の見える

図書館新聞

町が好き 人が好き 本が好き

2001・01・16・発行
第119号
文京区立本駒込図書館
〒113-0021
文京区本駒込 4-35-15
電話 3828-4117

2001年1月。21世紀になってしまいました。20世紀が産業革命の世紀とすれば、21世紀は情報革命の世紀となるのでしょうか。ソビエト連邦や東欧諸国が、国民生活のなかにおいての情報技術の急速な発展と浸透のために、解体していく有り様を感心しながらがめていたが、それが、情報革命時代の幕開けなのでないのでしょうか。これからの時代がどう移り変わっていくのか、興味深く味わうことにしましょう。

ふと思い出した場面が在ります。あるSF小説のなかに、記憶強化装置が発明されて、本を読むだけで読んだことをすべて記憶してしまうのですが、主人公が下宿先のおばさんにも使ってもらうことにしたら、にこにこしながら、「ぜひ、覚えたいことがあるんだよ」と言って、クッキーの焼き方を覚えるためにのみ使用しました。主人公は非常に戸惑っていました。

情報化時代といっても、人それぞれに知りたいことが違うわけです。心に傷を負った人たちを描いた「永遠の仔」、生まれつき身体に障害を持っている乙武洋匡さんが書いた「五体不満足」。随分、沢山のひとが読みました。生と死についても、五木寛之さんが「人生の目的」で、生きること自体が目的なんだ、と熱く語る。「葉っぱのフレディ」では、死のありようを静かに語っている。そういう様々な知りたいことを知ることができるように、わたし達は今年も努力していきます。

今年は巳(み)年。干支(えと)について。干支の知識は中国から朝鮮を通じて日本に移入され、暦年月日を数えることが行われてきた。中国でなぜそれらの動物を採用したかは不明。蛇については世界各地に様々な伝説や昔話が残っている。日本では、白蛇は神様のお使い、家の守り神として尊重されていた。

「十二支」 子(ね) 丑(うし) 寅(とら) 卯(う) 辰(たつ) 巳(み)
午(うま) 未(ひつじ) 申(さる) 酉(とり) 戌(いぬ) 亥(い)

